

安全か自由か
緊急事態が問う
「生権力」問題

power over life

批評家・作家 東浩紀

あずまひろさ

1971年東京都生まれ。東京大学大学院博士課程修了。株式会社ゲンロン創業者。著書に『存在論的、郵便的』(サンポートリロジー賞)、『一般意志2.0』、『観光客の哲学』(毎日出版文化賞)など。

本誌四月号に筆者が出席した対談が掲載されている。これからの情報社会は欧米型の人権・自由重視になるか中国型の監視重視になるかといったテーマだったが、わずか一ヶ月で状況が激変し隔世の感がある。新型コロナと「戦う」ため、いまはどの国もスマホの位置情報やビッグデータの活用に取り組んでいる。

なかでも最近注目されているのは、スマホ同士の接近を常時記録し、コロナの新規感染が確認されたとき、過去にその所有者と接近したスマホに注意を送付するシステムである。シンガポールがいち早く導入し、日本も似

たアプリの実証実験に取り組むという。去る四月十日にはアップルとグーグルが共同開発して近日中にOSに組み込むことを発表した。

これはかなり野心的な計画で、つまりは、ユーザーがいつだれと一緒にいたのか、スマホが常時記録し、あとから第三者が(匿名化を経てではあるが)利用できるようにすることを意味している。両社のスマホは世界で五〇億台を超えるといわれ、実現したら影響は絶大だ。数ヶ月前なら非難の大合唱を招いたであろうが、いまは驚くほど批判がない。感染症の恐怖のもと、自由やプライバ

シーの議論は急速に後退し、欧米と中国の差もあまり意味がなくなってしまったようだ。

筆者はこの状況に強い危機感を覚えている。感覚の麻痺が怖いからだ。現在の監視強化は「生権力」と深く結びついている。生権力はフランスの哲学者フーコーの概念で、人間を群れとして捉え、統計的かつ生物学的に管理して「生かす」権力を意味する。医学や公衆衛生と結びついて発達した権力で、世界がコロナ対策で一色になったいまは、まさにこの生権力が全面化した状況だといえる。

生権力そのものは悪ではない。けれどもそこには注意すべき点がある。生権力は起源が家畜管理の発想に近いので、個々の人間に適用するとひどく残酷になることがある。たとえばある特定の集団の女性の出産リスクが高いとして、彼女らひとりひとりに妊娠をやめろと命するのは、群れの管理としていくら「合理的」にみえても人権問題として許されない。生権力はあくまでも群れの管理に使われるべきで、人間の個体に適用してはならないのだ。ここに生権力の難しさがある。

ところがいま提案されている新しい監視、そしてその

背後にある感染症対策の思想は、生権力の個人への適用を目指しているもののように思われる。コロナの感染防止は、本来は群れの管理の問題である。他方で個人からみれば、感染者と接触しても感染することもあればしないこともある。その曖昧さがあるからこそ、私たちはあるていど自由に行動できる。けれども前述のような接触追跡の発想は、群れの管理の失敗を個人の行動の失敗に読み替えることで、人々からその自由を根こそぎ奪いかねない危険を秘めている。そもそも、あらゆる感染経路が追跡できるとは、あらゆる人間関係が追跡できることを意味するが、本当にそんな技術を開発してよいのかという問題もある。

群れの安全か個人の自由か。いまは緊急事態なので前者優先はやむなしとの意見も多いかもしれない。けれども問題はそれほど単純ではない。

コロナ禍が終わる日は必ず来る。そのとき感染症の恐怖のまえに自由もプライバシーも議論されなかったという「実績」は、大きな傷になって残るだろう。欧米と中国の差異が無効になったいまこそ、情報技術のありかたを落着いて考えるべきではなからうか。